

---

# いとくり 創造記～紅イ糸～

かたゆ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

いとくり 創造記〜紅イ糸〜

### 【Nコード】

N0710E

### 【作者名】

かたゆ

### 【あらすじ】

二人が出会ったのは橋の上だった。女は惚れた人形師の許へと押し掛け、二人は夫婦となった。けれど二人には子が出来なかった。だから作ろうと思った。人形を。二人で。いとくり第三話。

## 其の一

人形をつくるう  
人形をつくるう  
人形をつくるう

であったのははしのうえ  
こどもができなくったって  
こどもがうめなくったって  
それならそれでいいじゃない  
だから

人形をつくるう  
人形をつくるう  
人形をつくるう

ちいさなおててをさしこんで  
かわいいあんよをつないで  
きれいなおもてにおめめをはめこんで  
くちびるをしゅにぬって  
そうやって

人形をつくるう  
人形をつくるう  
人形をつくるう

いつかおんなのちをあびて  
いつかおとこのちをあびて

人形ができた  
人形ができた  
人形ができた

だけれどあれれおかしいな  
そのこがうごいたそのときに  
もとめたふたりはもういない  
だけれどあれれおかしいな  
そのこがうまれるそのまえに  
のぞんだふたりはしんじやった

昔の事。ずっと昔の事。在る所に人形を作る事を生業とする男が居りました。その男の作る人形はまるで本当に生きているかの様でした。作る腕の指先は本物よりも精巧で、唇は本物よりも瑞々しく、間接は線を引いたように美しかったです。男はその一生を人形作りに費やすつもりでした。既にその人生の殆どをそうして生きてきました。けれど。ある日、男の許に一人の女がやって来ました。女はこう言うのでした。

「私の、私の残りの人生を、貴方と一緒に  
男は悩みました。それも当然の事。その女は自分の人生の半分も生きていないほどに若かったのですから。からかわれているのだろうと思いました。けれど女は本気でした。  
そして。」

## 其二

いつの頃かももう判らない。ずっと昔の事だろうか。それとも本当は最近の事だったろうか。それすらも判らない。もう夢であった事のように臆気にしか覚えていない。けれど、その時の私は確かに幸せだったのだろう。

好きな相手と一緒になれて。

その人と暮らして。

その人と共に生きて。

その人に愛されて死ねたのだから。

初めて会ったのは橋の上だった。

その日、女は久しぶりに家の外へ出掛けていた。女は大店の一人娘だった。女は体が強くはなかった。だから滅多に外へは出してもえなかった。けれど、最近では体調も悪くはなかったし、偶には外の空気を吸った方が良くと医者も言うので、久しぶりに町へと出掛けたのだ。

町では人形芝居をやっていた。お供の女中と一緒に見に行った。それは素晴らしい物だったと女中は言っていた。話事態はまあ有り触れた物であった。けれど、人形がまるで生きているかの様であった、と。確かに凄いとと思う。只の人形を本物の人間の様に見せるのは。けれど、女は女中の様には感動出来なかった。女は別に人形が嫌いな訳ではなかった。けれど、特別に好きだという訳でもなかった。それは自分が娘であった頃には人形で遊びもした。けれど、只人並みに綺麗だとか、可愛いとか思うくらいだった。それに。

「人形を人間らしくしてどうするの」

ぼつりと言った。只の独り言のつもりであった。

「だから凄いんじゃないですかあ」

聞いていた女中が言った。

確かに凄いとは思う。でも、人形は人形である。仮令どんなに精巧に作っても人形が一人で動く訳でも、話をする訳でもない。事実、先程の芝居だつて後ろに黒子が居たのだし。だから女中の様に感動する事は無かつた。

そんな時だつた。突然女の履いていた下駄の鼻緒が切れたのだ。転びそうになる。女中が受け止める。

橋の上だつた。

「少し待っていて下さい。新しいのを買って来ますから」

そう言つて女中は慌てて行つてしまつた。此処から自分の家まではまだ距離がある。裸足で歩かせる訳にもいかないとでも思つたのだろうか。

私は別に裸足でも良いんだけど。

橋の手摺に腰を掛け女中を待つ女はまるで一枚の絵の様だつた。橋には人が行き交つている。でも誰も声すら掛けない。

思つた時だつた。其処に男が立っていた。全く気付かなかつた。

「どうしはつたんや」

訛りのある喋りで男が言った。

「あ、その、鼻緒が・・・」

突然の事でそれを言うだけで精一杯だつた。

ふむ、と言うと男は女の足元に屈む。

「あ、何を」

男の予期せぬ行動に女は動揺した。

「少し待つとれ」

男は鼻緒を直している。屈んだ男の体から、匂いがする。汗の匂い。男の匂い。それは父親や、店の使用人達とは明らかに異なつたものの様に思えた。けれど、決して嫌なものではなく、女にはそれがとても心地よかつた。

「直つたで」

低く、とても優しい声だった。礼を言おうとしたが旨く言葉が出ず、男はほなな、と行ってしまった。男が立ち去ったすぐ後に女中が戻って来た。

まだ男の背中が見えている。

「あの人の事を調べて頂戴」

言った女の頬は少し赤くなっていた。

男の身元はすぐに判った。男は他でもない、自分達の見ていた人形芝居の人形の作者その人であった。男は町から離れた所で一人の人形を作って暮らしている様だった。

女は忘れられなかった。ほんの少し、只少し下駄の鼻緒を直すだけの時間のことを。だから決めたのだ。

他人を好きになるきっかけなんてそれだけで十分だと、いつか女が言った。

結局、女は家出同然に家を出てしまった。向かった先はあの男の所。親に言ってもどうせ反対されるのだ。ならば。

### 其三

その日男は平素のごとく人形を作っていた。当たり前のことだった。平素と違ったのは戸を叩く音がしたことだった。男の許に客が来るなど滅多にあるものではなかった。だから平素とは違った。

「どちらさんや」

男が声を掛ける。しかし返事は無かった。不振に思いながらも仕方なく戸を開ける。

其処にいたのは。

黒髪の美しい。

その面はまるで人形おもての様な。

一人の女だった。

覚えて、いらつしやいますか。

女が問う。暫く考え込んで男が口を開く。

「はて。何処かでお会いしましたか」

男は覚えていない様だった。女は少し眼元が潤む。けれど、それを必死で押さえて続けた。

「あの、橋の上で・・・」

思い出してくれなかったら如何しようと思った。でも、もう決めたのだ。此処まで来て後には引けない。

男は矢張り暫く考える。

矢つ張り覚えていないのか。この人にとっては所詮その程度の事だったのか。

そう思った時だった。

ああ、と男が手を打つ。

「あの時の娘さんかえ」

覚えていてくれた。先程まで必死で堪えていた泪が一気に溢れてくる。嬉しかった。あの一瞬の出来事を覚えていたという、只それだけの事が。

「ど、どないしたんや、何で泣くんや？頼むから泣かんといてや」  
男は如何すればいいのか判らずに戸惑っている。

「違うの・・・嬉くって」

眼を擦り乍ら女が言う。

「嬉しい？何で・・・」

男は訳が判らず、必死で女を宥めようとする。取り敢えず、家中へ入るようと言う。

言われて女が後へ続く。家の敷居を跨いだ時、女は感じた。女の鼻に、肌に、それは纏わりついてくる。

「嗚呼、この匂いだっただ・・・」

それは、男の匂いそのものだった。家の中には作りかけの人形の部品やら何やらが散乱している。その一つ一つから、男と同じ匂いがしてくる。女には家そのものが男であるかの様に感じ、まるで男に優しく抱きしめられているかの様にすら感じられた。

暫く女は呆けていた。

「だ、大丈夫か？」

男が問う。女ははっとして涙を拭う。

「あ、その、お見苦しい所を・・・」

「ごめんなさいと何度も謝る。」

「いや、ええんや、ええんや。けど、何で突然泣いたりなんぞしたんや。私は何ぞしたんか。せやったらごめんなあ。堪忍してや」

そうは言ってみたものの、男にはとんと覚えのない事であった。

この女と会ったのは一度きりの事であるし、何より草履の鼻緒を直したというだけの事である。しかし、取り敢えず落ち着かせようと謝り続けた。優しい男なのだろう。

「あ、違うんです。そうじゃない、そうじゃないの」

頭を下げる男に必死で訴えかける。

「私、嬉しかったんです。あの時の事を覚えていてくれて。もしかしたら忘れてるんじゃないかって・・・それで」

本心だった。

「あの時って、橋の上で鼻緒直したった時の事やる。そんなんで何で・・・」  
たかがそれだけの事を覚えていた事で何が嬉しいのか。男にはいまいち判らない。

「そうです。変・・・ですよね」

女は下を向いてしまった。言われてみれば確かに大した事ではない。そんな小さな事で眼の前で突然泣かれてしまえばそう思われても仕方がないだろう。けれど、他人にとってはそんな小さな事でも、女にはとても大きな事だったのだ。とても。

「いや、変というか・・・」

男が口籠る。他に言いようが無かった。暫くの沈黙が続く。

沈黙に耐えかねて男が口を開こうとした時だった。

「あの」

男よりも先に女の言葉が先に出る。

「私を、此処へ置いて下さい」

眼は真っ直ぐに男の眼を見ている。その眼は潤んでいた。

## 其の四

「・・・は？」

理解出来なかった。橋で鼻緒を直したただけの女が突然やって来て、泣き出して、此処へ置けとは。どう考えても理解は出来ない。だからと言って何かを企んでいる様にも見えない。そんな器用な事が出来る様には見えない。そもそも自分を騙した所で何かこの女に得があるのか。

「ちよ、待ちいな。落ち着きいや。何を言つとんのか」

「落ち着いてます。私を此処へ、私の、私の残りの人生を、貴方と一緒に添い遂げたいんです！」

一世一代の告白だった。女は興奮している。顔は真っ赤だった。言ってみてから自分がとんでもない事を言っているのだと気付く。けれど、もう決めたのだ。後悔は無かった。

「何でや、何で私なんや。一遍会っただけやないか。意味判つとんのか」

聞き間違いだと思った。否、思いたかつたのかもしれない。

「判つてます！」

女の口調は強い。

「こんな爺やなくても、他に居るやろ」

当然の反応ではある。如何見ても眼の前の女は自分の半分、もしくはそれ以下しか生きていないようにしか見えなかったのだから。

「貴方がいいんです！」

矢張り女の口調は強い。眼は変わらずに真っ直ぐ男を見ている。「そんな言われたかて・・・」

男が眼を逸らす。横目で見ても女の眼は男の眼を見続けている。「・・・あんなあ、良お考えてみい。こんな爺の何処がええんや。もつと若くて、良え男は仰山居るで。な、考え直し」

優しく男が諭す。けれども、その優しい声が逆効果だった。女に

は魅力にしか思えてならない。

「厭です！もう決めたんです！」

女の口調に負けそうになる。しかし乍ら、そうもいかない。

「それに、親御さんが許さんやる、な」

「親は関係ありません。私の人生です！」

効果は無かった。

「・・・仮令一緒になっても、や。先から言うてる通りの老いぼれや。あんたよか先に死んでまうんや。その後は如何すんねや。あんたにはまだその先何十年も人生が残ってるんやで。その後は一体

」

如何すんねや。

逸らした眼を女の眼へ戻す。真剣だった。自分と一緒になくても自分の方が先に死ぬ。当たり前前の事だ。自分には女の為に残すだけの財産など無いのだから。

無いんです。

女がか細い声を出す。

「私には、もう、何十年も無いんです。」

そんなに無いの、と先程までとは打って変って細い声を絞り出す様に女が言う。

「無いつて」

男が繰り返す。

「私は多分、もうすぐ死ぬんです。生まれつき身体が強くは無いです。だから」

だから、最期は好きな人と一緒に居たいんです。

女は悲しそうに言った。矢張り嘘を吐いている様には見えない。

「しかしなあ。ええと」

糸です、と女は言った。

「・・・於糸さん。せやったら尚の事、他の、もつと良え男さがしや。残り少ない人生を棒に振ったらあかんで」

男にそう言われても女の気持ちは変わらなかった。

結局、女は男の家に居ついてしまった。男が何度帰るように言っても一向に聞こうとはしなかった。居場所を突き止めた両親が何度も連れ戻しに来たがそれは同様であった。女は見かけ以上に頑固だったのだ。ある時は諭し、ある時はこんなにまで怒る姿は見たことが無い程に取り乱す父を前にしても女の気持ちは変わらなかった。

父は、親娘の縁を切ってしまった。  
母は、泣いていた。

それでも、女に後悔は無かった。最初は如何にか考え直すように親と共に説得していた男も此処まで来ると女の気持ちに負けてしまった。

そうして二人は夫婦となった。

## 其の五

女が男の家に押し掛けてからどの位の時が経っただろうか。五年、或いは六年だろうか。女は仕合せだった。それは男も同様であった。時には夫婦喧嘩もしたけれど、結局は元の鞘に収まった。何一つ不満の無い、とても充実した毎日だった。

只。

二人には子が出来なかった。

女の身体が子を産むことに耐えられなかった。

二度と子は産めないだろうと言われた。

初めは自分の我儘から始まった生活だった。自分の死を、最期を好きな人に看取って欲しかっただけだった。只それだけだった。けれど、愛して、いつしか愛されて、満ち足りて。そして、愛した人の子が欲しいと思った。

それはいけない事なのだろうか。

そんな事を考える様になった。

そして。

女の身体に限界がやって来る。

死の気配が段々と近づいてくる。

それは最初から判っていた事だった。覚悟していた事だった。確かに自分は仕合せだった。ただ。

子が産めなかった事だけが心残りだった。仮令、子が産めても、その子を育てるだけの時間がもう、女には残されてはいない。それも判っていた。

それでも。

自分の存在を忘れられない為に。

自分を覚えていてもらう為に。

自分が妻であった証として。

子供が欲しい。

子供が欲しい。

だから。

作ろうと思った。

夫と二人で。

二人の人形を。

そして二人は作り始めた。眼元は女に似てつり眼、口は男に似せて、というふうに。二人で顔を見合わせながら。女は自分の着物を仕立て直してその子の着物を作ったりもした。

その子は女の子だった。そうしたのは女の願望だった。

「もし、子供が産めたのなら女の子が欲しかったの。きっと私に似て美人よ」

嬌笑と共に冗談まじりに言った事だった。

女は楽しそうだった。とても。とても。

人形は。

その子は。

繰子くりこと。

名付けられた。

作ろうと決めた時から、ずっと考えていた名前。出来上がるその時まで夫には内緒にしていた名前。繰る子なのか、或いは繰られる子なのか。それは判らない。

出来上がったその人形は、まるで本当の娘の様だった。

女は毎日その子の着物を替え、髪を梳かし、話しかけ、本を読ん

で聞かせた。それは他人から見たならば正気の沙汰とは思えないだろう。けれど女は真剣だった。本気で人形を娘と思い、本気で育て、本気で愛した。

ある日、女の許に店の女中がやって来た。縁を切るとは言ったものの、矢張り娘は娘。見捨てきれなかったのだろう。毎月、決まった日になると薬を持ってやって来た。元々この女中は女と仲が良かった為、来た時には世間話をして帰るとというのが平素の事だった。

そんな女中が人形が出来て以来初めて家へとやって来た。

女はこの女中に人形を紹介した。自分の娘であると。

「名前は繰子って言うのよ。可愛いでしょ？ほら繰子、ご挨拶なさい。ごめんなさいね、この子、人見知りで」

女は困った様な顔をする。

女中の眼には女の神経はもう、まともではない様に見えた。勿論、その前に子が出来なかったからその代わりであるとは聞いた。しかし。女の眼は本気でそれを言っているのだという事を語っていた。自分が女の親の店へと奉公に来て以来、長年一緒に過ごしたのだ。それくらいは判った。思わず横に居る 男の方を見る。男は優しく笑っていた。

仮令他人に如何見られようが、妻が楽しんでいるのだ。それを望んでいるのだ。

だから男はそれで良いと思った。

女中は帰っていった。少し、悲しそうだった。

## 其の六

そして女の人生は終る。

平素の様に繰子を着替えさせていた時だった。着物の袖に娘の腕を通す。帯を締め、頭を撫でる。娘の前に廻る。屈んで、可愛いわよ、と言おうとした時だった。

言葉は出なかった。

言葉の代わりに女は血を吐いた。

咽び、畳に手を付く。

咽続ける。

見上げた娘の顔は自分の吐いた血で赤く染まっていた。

「ご……めんね……汚れ、ちやつ、た……ね……」

女は、最後の力を振り絞って娘にかかった自身の血を拭おうとする。女の白く、細い手が震えながら娘の頬に伸びる。そして優しく拭う。

「い、ま、きれい、にして」

顔の半分を拭った時、女は力尽きた。娘を押し倒す様にして或いは抱き締める様にして 倒れていた。

それが女の最後だった。

夫が見つけた時には、女は既に事切れていた。

男は泣いた。

思えば、あの橋の上から始まった事だった。女の一目惚れから始まった事だった。あの時、橋を通らなかつたなら、気付かずに女の前を素通りしていたなら、この生活は無かつたのだろう。

楽しかった。気が付けば自分も女を愛していた。彼女はいつも楽しそうだった。可愛くて、そして美しかった。

彼女の声が。優しい微笑が。怒った顔が。仕草の一つ一つが。男の内で繰り返される。幾度となく。

五年か、六年か。良く持った方だろう。

ふと、娘の方に眼が行く。娘は妻の血で真っ赤だった。妻の手によつて拭われた娘の顔は赤みが差している様にも見えた。拭われていない半分を男の手が拭う。血は乾いていて落ちなかった。

「もう、終いかあ」

男は泣いた。泣いて、泣いて。もう涙も出なくなった。

母の死を、父の悲しみを、娘は何も判らないかの様に只只見ていくだけだった。

男は何もしなくなった。否、出来なかった。生業である人形作りも出来なかった。その存在は大きすぎた。それを失った。だから出来なかった。

その男の背後に、女は居た。

女は男の横に座り、顔を覗き込む。

『私は此処にいますよ』

もう、その声は男の耳には届かなかった。

男の手に触れようとする。

それも出来ない。

『お願い・・・気付いて・・・』

悲しかった。

女は成仏出来なかった。自分は確かに仕合せだった。けれど、夫の事が気がかりで傍を離れられなかった。

暫くは何も無かった。男は只、人形に話し掛ける。妻との思い出を。妻がしていた様に娘の着替えをする。もう娘の為だけに生きていく様なものだった。娘がいるから思い出し、悲しくなる。いっそ壊してしまえば少しは楽になったのだろう。けれど優しい男であっ

たから、とてもそんな事は出来なかった。

真逆。夫に覚えていてもらう為だけに作った娘が、夫の苦しみに  
なるとは思わなかった。こんな事になるのなら。

死んでから女はそんな事ばかり考える様になった。けれど、決して娘が憎い訳ではない。如何すれば良いのかが判らない。否、如何にも出来ない。死んだのだから。死とはこういう事かと思ひ知る。身体  
の苦しみは無くなった。けれど、娘と語る夫を見ていると心が苦しくなる。張り裂けそうになる。如何して自分は死んでしまったのだらう。如何して死ななければならなかったのだらう。如何してもっと生きられなかったのだらう。如何して。考えても、答えは出ない。

貴方の為に、もっと生きたかった。

生きていた頃よりも、より強く思うようになった。

## 其の七

その日、珍しく男の許に客が来た。二人の侍だった。男が二人を家へと上げる。侍の一人が名を名乗る。何やら何処何処の誰誰に仕えているのだとか言っている様だったが、女には難しくよく判らなかつた。そして、侍の話は本題へと入る。

「実は、我が殿がそなたの作った人形を見られて大層気に入られてな。殿の為に一体作ってはくれまいか」

侍は偉そうだ。当たり前前の事である。男とは身分が違うのだから。けれど、女は気に入らなかつた。言い難そうに男が言う。

「・・・人形は、もう作れまへん」

何故だ、と侍が問う。

「妻を亡くしました」

だから作れないと男は言う。侍は少し同情したようだった。

「作れないのならば、今在る人形でも良い」

言い乍ら男の傍に在る人形を見る。

「・・・多少汚れてはいる様だが、中々如何して、美しい人形ではないか。否、その血の様なものが美しさを際立たせているのか」

その人形ならば殿も満足されると関心した様に言う。

女は血の気が引く様な思いになった。

それは。それは私の娘。お願い、その子だけは。

「それは、それだけは勘弁してください！それは妻の形見なんです！」

男は必死で頭を下げた。夫も同じ思いだったのだ。

「そうか・・・しかしな、これは殿の願いなのだ。この意味は判るな」

それは断れないという事だ。女にもそのくらいの事は判った。侍は後日また来るから考えておく様にと言つて帰つていった。

あの子を渡すくらいならば。

男には悩む事すら許されなかった。人形を作る事にした。再び来るであろう侍にそう告げるつもりだった。しかし。

御免、と再び侍がやって来た。先日と同じ二人組みである。男が戸を開ける。その少し後ろから女が様子を伺っている。

「人形の件だが」  
言葉が終わらないうちに男は作らせて戴きますと言った。しかし侍は頸を振る。

「否、実はな。先日の人形の事を殿に申し上げたら是非とも欲しいと言われるのだ。残念だが」  
すまぬ、と侍が言う。しかし頭は下げない。

夫の後ろで妻は放心していた。  
「そんな・・・何で、何で言うたんです？妻の形見やと言ったやないですか！」

男は侍の袖を掴み必死で問い質す。  
「離さぬか無礼者めが！」  
侍が男を突き飛ばした。男は倒れ、柱に後頭部をうちつけた。頭からは血が出ている。

「あなた！」  
女が駆け寄る。けれど抱き起こす事すら出来ない。  
「貴様等には判らぬのだ！武士の務めというものは！」  
侍が怒鳴る。乱れた袖を払い家の中へと入る。

そんなもの、判るものか。  
侍が人形へと手を掛ける。  
「やめて！その子だけは！」  
どんなに叫んでもその声は届かない。

おい、と侍がもう一人を呼びつけ人形を運び出そうとする。そして持ち上げた。

その時、男が侍に組みかかった。  
「お願いや！その人形は、その子だけは勘弁して下さい！」  
必死で止めさせようと叫ぶ。しかし。

女の頭の中は真っ白になった。

## 其の八

一体何が起こったのだろうか。

今日は家に先日来たお侍がまたやって来て、夫と話をして、あの人を突き飛ばして、あの子を連れて行くこうとして、あの人を止めようとして、それから……それから……ぎらぎらと光る……あれは、かたな？あか、い……あれは……あのひとのち？

い……や……嫌ああああ！

『嘘よ、嘘よ、嘘よ、嘘よ！嫌よ、嫌よ、嫌よお！貴方まで死んで如何するのよお！』

男は畳の上で倒れている。男からは血が出続けている。

女は叫んだ。夫に向かつて。必死で夫を揺さぶろうとする。聞こえはしないのに。出来はしないのに。助けを呼ぶ事すら出来ない。何も出来ない。胸が潰れそうになる。同時に、何かが胸の内から濁流のように溢れ出してくる。気が狂う。

『繰子、お願いよ、助けを呼んできてよお！』

遂には答えるはずの無い人形に向かつて叫びだす。

人形は何も答えずに倒れている。

そして。

嘆きの矛先は。

夫の生を奪った者達へと。

向けられた。

如何して・・・。  
如何して、こんな事に・・・。

気が付けば、女は一人で泣いていた。三つの死体に囲まれながら。  
一つは夫。二つは侍。

女は怒りに任せて侍達を殺してしまった。侍達の顔は恐怖によって元の形が判らない程に歪んでいた。女の着物は侍の血で真っ紅に染まっていた。

それはとても簡単だった。とても。

『あなた、あなたあ・・・』

男を呼び続ける。けれど、男はもう、動かなかった。

声は嗚咽へと変わっていった。

そして。

人形は、畳の上にだらしなく倒れている。

人形は、斬られた夫の血で真っ赤だった。

男の傍で女は泣き続けた。泣いても泣いても泪は枯れる事は無かった。どれ程の間そうしていたのか。それを数える者は誰も居なかった。男の許には滅多に客は来ない。自分の為に薬を届けてくれたいた女中も自分が死んでからは来なくなった。尋ねてくる友も居ない。男は孤独だった。漸く気付いた。生きている間は楽しくて、仕合せで。判らなかつた。だから、誰も夫の死に気付かなかつた。  
『・・・私はこれから如何すればいいの？』

答えは無い。

女は待っていた。

待っていれば死んだ夫に会えると思つた。

自分と同じ存在になった夫に。  
そうしているうちに侍たちが現れた。何か言っている。叫んでいる。刀を振り回して暴れている。女は気にしなかった。煩い。自業自得だと思った。暫くして侍たちは何処かへ行ってしまった。

けれど、いつまで経っても夫は現れなかった。

其の九

これは罰だろうか。人を殺してしまった私への、罰だろうか。それとも夫の孤独に気付かず、に我儘に生きていた事への罰だろうか。夫は仕合せだったのか。私で良かったのか。本当は厭だったのでは無ないのだろうか。私を本当に・・・愛していたのだろうか。考えて考えて考え続けた。答えは出ない。答えてくれる人はもう居ない。

そして女の視線が倒れたままの娘へと向けられた。

「・・・如何して、如何して何も言わないの？あんたが・・・あんなんかが居たから・・・！だからこの人が・・・あんたの所為よ！あんなんか作らなければ！」

人形に怒りをぶつける。それは身勝手な事だと判っていた。けれどもう、そうする事でしか自分を保てなかった。

人形は答えない。只只、何も言わず沈黙し、倒れている。

筈だった。

かたん。

女が眼を見開いた。

かたん。

女は自身の眼を疑った。  
人形の腕が 動いた。それは腕を上げる。しかし、すぐにだら

しなく落ちてしまう。二三度それが繰り返されてから、手を畳につけて起き上がるうとする。ゆっくりと上半身を起こそうとするが、旨くいかないのか崩れ落ちてしまう。けれど、再び起き上がるうとする。女は動けなかった。怖くて動けなかった。

ずる。

人形は腕だけでもって必死で女 母 の許へと近づいて行く。

「い、や、来ないで」

言った次の瞬間、人形の動きが止まった。そして血塗れの顔を此方 女の方 へと向ける。

微かに何かが聞こえる。

い。

これは 声？何？何を言っているの？

女は恐怖した。その存在が理解出来なかった。

「・・・え、ん、あ、い」

人形が何度も言葉を繰り返す。

「お、え、ん、あ、い」

女に段々とその意味が判ってくる。

ごめんなさい。

女にはそう言っている様に思えた。その意味が判った時、女の頬を一筋、涙が通った。

人形は繰り返し続けている。感情のない声で。

「あ、あ」

人形は必死で謝っているのだ。何も出来なかった自分を、父を見殺しにした自分を、母から責められた自分を、赦してもらおうと必死で謝り続けているのだと女は思った。

恐る恐る人形に近づこうとする。

しかし、人形はそれに反応したのか、旨く動かない軀体からだで後ろに下がろうとする。

真逆、私が来ないでと言ったから？

人形、否、娘には母の恐怖が判ったのだろうか。

『ごめ・・・んね、ごめんね！』

女が娘を抱きしめる。出来ない筈なのに何故かそれが出来た。

「ご、め、ん、え」

必死で娘が母の真似をしようとするが、旨く喋れない。

『いいの、もう、いいのよ。貴女の所為じゃない・・・！』

優しく頭を撫でながら女が言った。

娘が真似をして頭を撫でようとするが、矢張り上げた腕はだらりと落ちてしまう。

女にはその仕草が堪らなく愛おしく思えた。

もう、恐怖は消えていた。

## 其の十

それから暫くそのままの状態で居たが、すぐにこれから如何すれば良いのかと思う。この子はこれから如何なるのだらう、と。

改めて娘の顔を見る。血塗れである。そつと頬を拭ってやる。不思議な事に血が消えて、赤みの差した顔が現れた。

私が不安がっていたらこの子も不安がってしまう。  
母はそう思った。

如何するのかは後で考える事にして、取り敢えず喋れるのならば名前を教えようと思った。

『貴女の名前は』

言おうとして女は一度言葉を止めた。そして一呼吸擱いて改めて言った。

『あなたの名は、繰子や。言ってみ？』

それはどこかぎこちない言葉であった。

それは、夫と同じ訛りのある口調だった。女の一番好きな男の喋りだった。

女は必死で夫の喋り方を思い出す。

忘れてしまいそうだったから。

そうする事でしか夫の事を、思い出を繋ぎ止めておけないから。

もう、会えないから。

だから。

『言ってみい？』

ぎこちないが、夫の様に優しく語る。

「く、い、こ」

娘は必死で自分の名を言おうとする。母同様ぎこちないものであった。

『そつやあ。良う、言えたなあ』

泣いたような、笑ったような顔でそれを褒める。最後の方は声が擦れていた。

嗚呼、そうか。この子を見て漸く思い出した。夫が仕合せだったか如何かなど、判りきっていた事ではないか。私はこの眼で見て、この耳で聞いていたのではないか。夫の笑顔を、言葉を、悲しみを。この子こそがその証。この子こそが二人の愛が存在していた事の証なのだ。

## 其の十一

。 。 。

『 夢、かあ 』

女が眼を覚ます。

『 懐かしいなあ。楽しかったなあ 』

寂しそくにぼつりと言った。そして欠伸をし乍ら娘を見る。娘は女の横で眠っていた。その横には別の少女が眠っている。

『 ちやうかな。今も、それなりに楽しい、かな 』

けれど、出来ることなら、あの人も共に居られたなら、どんなに良かったか。

『 ま、しゃあないわなあ 』

苦笑と共に髪を掻き揚げる。

いつしかぎこちなかった女の口調は、夫のそれと何ら変わらないものになっていた。それだけの時が過ぎたのだろう。

あれから、女は娘と共に夫との思い出の詰まった家を離れた。辛いから。悲しいから。どんなに待っても夫には会えなかったから。

夫を墓に埋めてやる事すら出来なかった。

家を出た瞬間、少しだけ身体が軽くなった様な気がした。もう、身体は無いのに。

それは、女が自分で自分を縛っていたのだろう。男の家に入ったあの日から。

自分の我儘から生まれた娘は、成長している。人間のそれとは異なるけれど。確実に成長し続けている。偶に少し、口が達者になり過ぎたとは思っけれど。

娘は人間になりたいと言った。自分の読んで聞かせた本の影響だろう。だから、旅を続けている。人間になれるのか如何かは判らない。けれど、その願いは叶えてあげたいと思う。

今はそれが、それだけが女の存在理由になっている。

二人の旅はそれまで続くのだろう。

さて。思い出に浸るのも此処までやな。

すう、と大きく息を吸い込む。そして。

『いつまで寝とんのや！とっとなと起きんかい！』

平素通りの朝がやって来る。

そのこはいつしかなんになる

そのこはいつしかただのひと  
ひとりでいきてゆくのかな  
いつしかのぞんだそのひとは  
そのこにおいてゆかれます  
かなしいけれどもしかたがない  
さびしいけれどもしかたがない  
それがそのこのためだから  
それでも

人形をつくろう  
人形をつくろう  
人形をつくろう

とくり 創造記 了

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0710e/>

---

いとくり 創造記～紅イ糸～

2009年3月24日09時00分発行